



泉類治神父

何ごとも最初が肝心である。私は昭和三十一年、アナウンサーとして山口放送に入り、七年後の四十四年に心臓病を患って一年間休職。それを契機にアナウンサーをやめた。

しかしそれ以後も結婚披露宴の司会を頼まれることが多く、合わせると百五十回は超えていると思うが、そこで心がけたのは開口一番の言葉と最初の三分間のしゃべりである。

## イラストも得意な神父



藤屋 侃士  
(下松市幸ヶ丘)

4

その披露宴を思い描きながら、最初の三分

くらいのしゃべりを何回も繰り返して練習する。この部分で人の心をとらえ「きょうの司会者はうまい」という印象を与えればしめたもので、あとで多少の失敗をしても気にはならない。

文章でも同じことが言えようが、ましてシリーズで毎回目につくタイトルの大切さは言うまでもないだろう。

「サビエル生誕五百年 巡礼の道」というタイトルは比較的早く決めたが、字だけでは単調だし、バックを何にするか迷った。

団長のヴィタリ神父

に相談すると、即座に「泉神父に何か描いてもらったら？」と言われた。

さすがである。なぜ気がつかなかったのだろうか。スペイン出身のルイス・フォンテス神父は帰化されて、日本名を泉類治という。上智大学をはじめ各地の学校で教え、現在は徳山カトリック教会におられる。

マンガ、イラスト、映画解説、そのうえ料理も得意で、KRYテレビに出演されたこともある。味も抜群で、作るところを見なければもつとおかしい。先ごろPHP研究所から「日本では教えない」という本も出版された。とにかく多才かつ博学な神父で、朝日新聞や日刊新周南でも大きく紹介されたので、ご存じの方も多いかもしれない。

父はサビエル家の末息子。上三人は女性、四番目が長男のミゲル、その末えいが泉神父なのである。もちろん、お願いすると快く引き受けて下さり、出来上がったのがこの連載に使っているタイトルのイラストである。

巡礼の最後に訪れる聖地がサンティアゴ・デ・コンポステラ。ヨーロッパのキリスト教徒はこの地を目指して徒歩で巡礼する。昔はこのイラストのようにシンボルマークの帆立貝をつけた帽子にマント、ツエには水を入れるひょうたん、腰にはパンを入れる袋を下げる。こんな姿で二カ月近くかけて巡礼したという。

今は巡礼宿に泊まれなかつた時のための寝袋などを入れた大きなリュックサックを背負っての旅で、私たちも何人にも出会った。



朝日新聞や日刊新周南で紹介された泉神父